

18: 624-625; (1950). Lichens of Japan (I). Gen. *Cladonia*. 255 pp. Thomson, J.W. (1967). A manual of the Lichen Genus *Cladonia* in North America. 172 pp. Univ. of Tronto Press, Tronto.

* * * *

東南アジア産のクラドニアの四新種を記載した。

1) *C. caliciformis* は形態的には *C. calycantha* (フマルプロトセトラール酸含有) に最も近く、又、*C. dissimilis* (ホモ石花酸、フマルプロトセトラール酸、及びアトラノリン含有) にも似るが、アトラノリンを含まないので両者とは区別出来る。

2) *C. melaleuca* の子柄は、僅かに先端を残して全体黒色の髓を有するのが特徴で、その上に、皮層は恰も黒地に白の斑紋状に観察される。又、茶色の子器を有し、盃底や分枝点のみならず、子柄の随所に穿孔や、亀裂を有し、更にタムノール酸を含む。従って、Sect. *Cladonia* (= *Chasmariae*) に属するが、形態的に類似した種は、現在他に認め難い。

3) *C. perfossa* は北米特産の *C. multiformis* (フマルプロトセトラール酸含有) の様に子柄に多くの穿孔を有するが、より灰白色を呈し、更にアトラノリンを明かに含有する。又、同じく台湾産の *C. submultiformis* にも関連があるが、これはホモ石花酸を常成分として含有するので、本酸を欠く新種とは、明らかに区別される。

4) *C. tenuicaulis* は無子器であるが、赤色の粉子器が確認され、更にウスニン酸及びタムノール酸を含有するので、Sect. *Cocciferae* に属する。子柄は先細りで、しかも全体細手に伸長した特徴的な形状を示す。

○シロリュウキュウ・オオリュウキュウ系ツツジの園芸品 (山崎 敬・山崎 富佐子) Takasi YAMAZAKI and Fusako YAMAZAKI: The cultivars belonging to *Rhododendron mucronatum* and *R. hortense* (Plates VI-VII)

シロリュウキュウツツジ *Rhododendron mucronatum* (Bl.) G. Don とムラサキリュウキュウツツジ *R. hortense* Nakai の系統のものには多くの園芸品があるが、ともにモチツツジ *R. macrosepalum* とキシツツジ *R. ripense* との交配種で、シロリュウキュウ系のもはキシツツジに近い形態をもち、ムラサキリュウキュウ系(まぎらわしい名なのでオオリュウキュウ系と呼ぶ)のもはモチツツジに近い形態である。同じ両親をもとにしていても、両者は一応形態的に区別できるので、別個の交配種としてあつかってよいと思う。

シロリュウキュウ系のもは花梗に白ときに褐色の長毛が密生し、腺毛はないか、あってもめだたない。子房には長い白毛が密生している。花や葉はオオリュウキュウ

系よりやや小形である。オオリュウキュウ系のもは花梗に腺毛が密生し、子房にも腺毛がはえている。花や葉は大形で、全体モチツツジに似るが、おしべが7~10本あり、後者が5本なのと異なる。モチツツジは枝がまっすぐのびて、木は直立する傾向があるが、オオリュウキュウ系は多くの枝をだして、横に広がる傾向がある。

シロリュウキュウ系の品種はシロリュウキュウの他、リュウキュウシボリ、フジマンヨウ、シロマンヨウなどがあり、オオリュウキュウ系のものにはミネノマツカゼ、セキデラ、シラユキなどがある。紅紫色の花のみからなるムラサキリュウキュウはウスヨウ(薄葉)とよばれるが、色々な形のものがあり、区別がむずかしい。これについてはいずれ別に報告するが、ここでは古くから知られているものを中心に解説する。

1) 白琉球(シロリュウキュウ) *R. mucronatum* cv. *Mucronatum* キツツジに近いが、葉の巾がかなり広く、がく片に腺毛が多い。花は白色で、上部内面に緑色の斑点がある。リュウキュウ系のツツジの中では最も早く江戸にもたらされ、広益地錦抄(1719)に正保年中以後渡来草木類の中にリュウキュウツツジとしてのせてある。正保(1644)から寛文の終り(1672)の間に、江戸に移入された珍しい植物の一つだったわけである。このリュウキュウツツジが現在のシロリュウキュウであることは、錦繡枕(1692)の記事から明らかである。当時としては珍しいもので、また強壮であったため、江戸に入ってから30-40年後の元禄年間には、江戸附近ではごく普通のものとなっていたことが記されている。リュウキュウ系のもとはヒラドツツジ系のものが区別されたのは比較的新しく、大正時代までは両者は一括してあつかわれていた。琉球には関係のないこの植物にリュウキュウの名がつけられたのは、平戸ツツジとの混同からきていると思われる。

2) 琉球絞(リュウキュウシボリ) *R. mucronatum* cv. *Riukiushibori* (Komatsu) Hara 全体はシロリュウキュウに似るが、花は白地に紅紫色の吹掛および縦紋りが入る。比較的新しい品種とみられ、江戸時代の本には今のところ見つからない。絞琉球(大石, 1916)、琉球絞(小松, 1918)として大正の初期に名がでてくる。美しい模様の花なので、古い庭園にはしばしば見かけるものである。

3) 藤万葉(フジマンヨウ)、藤牡丹 *R. mucronatum* cv. *Plenum* (Sims) Wilson 全形はシロリュウキュウに似る。花はうすい紅紫色で、おしべが弁化して20-30枚の花弁からなる万重咲である。外側のおしべは完全に弁化しているが、内側のものは不完全で形も小さくて退化した花粉袋が残っている。めしべは見られない。花が美しいので、シロリュウキュウに次いでよく見かける品種である。錦繡枕にはこの名はでてこない。同書にある江戸万重がこれに近いものようである。本草花蒔絵(1739)に初めてでてくるが、その記事からすると、弁化した花弁は本来の花弁よりずっと小さく、シロマンヨウと似た花型で、現在のフジマンヨウとは異っている。牧野富太郎氏はフジマンヨウに似て、弁化の程度が著しくないものにフキズメリュウキュウの名を

あたえている (植研 8: 23, 1932)。個体によって弁化の程度に変異があるのであろう。

4) 白万葉 (シロマンヨウ), 白牡丹 *R. mucronatum* cv. *Narcissiflorum* (Planch.) Wilson 全形はシロリュウキユウに似る。花は白色でおしべが弁化し、8-20枚の花弁からなる万重咲である。弁化の程度は不完全で、本来の花弁にくらべて小形であり、多くは退化した花粉袋をもつ。めしべは残存している。弁化の程度が不十分で、退化した花粉袋が茶色いしみのように残っているので、フジマンヨウほどの見事さがなく、あまり広まらなかつたらしい。現在ではごくまれにしかみられない。出現は古く、花壇綱目 (1681) に名がでてくる。錦繡枕に白万重としてのっているのが現在のものと一致する。

5) 峯の松風 (ミネノマツカゼ), 大琉球 *R. hortense* cv. *Oriuki* (Komatsu) comb. nov. Syn. *R. rosmarifolium* f. *Oriuki* Komatsu シロリュウキユウ系のものに比し、枝は疎大で葉も大きく、腺毛が多い点で、モチツツジに近い品種である。花は大形で白色、花弁の上部内側に緑色の斑点がある。純白色の花はまれで、一般に同じ株の枝に紅紫色の縦紋りや飛入紋りの斑が入るのが普通で、ときに全体が紅紫色の花も混る。古い庭園などにはよくみかけるが、オオムラサキにおきかわって減少しつつある。錦繡枕にすでにこの名がのっている古い品種である。

6) 白雪 (シラユキ) *R. hortense* cv. *Shirayuki* nov. 全形ミネノマツカゼに似る。葉は倒卵状長楕円形で、夏葉には長白毛が密にはえている。ミネノマツカゼより葉質はややうすく、花は純白色で、裂片はより丸味をおびて豊かであり、紅紫色の斑は入らない。シロバナモチツツジにも似るが、冬葉、夏葉ともに上部がやや巾が広く、先がとがらず丸味をもち、おしべは7-10本あるので異なる。オオリュウキユウ系の一品とみられる美しいものなので新名をつけることにした。オオムラサキなどと共に広い庭園などにうえると見ばえのする美しいものと思う。

7) 関寺 (セキデラ) *R. hortense* cv. *Sekidera* (Komatsu) comb. nov. Syn. *R. rosmarinifolium* f. *Sekidera* Komatsu 全形ミネノマツカゼに似る。花は白地で、花冠上部内面に紅紫色の斑点がある。白地のみのもの、白地にうすく紅紫色の飛入斑が入るもの、全体やや薄く紅味を帯びるものなど、花色には変化がある。錦繡枕には、'うす色大里ん、紫のとびりあり、花中にかのこすこし'とあって地にうすく色のあるものをさしているようである。花弁の地が純白色のものはあざやかで見事であり、しばしば庭園にみられる。

8) 白錦 (シロニシキ), 白滝 *R. transiens* cv. *Shironishiki* (Komatsu) comb. nov. Syn. *R. rosmarifolium* f. *Shironishiki* Komatsu 小松春三氏がこれをリュウキユウ系の品種としてあつかい、後の色々な本にもそのまま踏襲されている。現在シロニシキとして知られているものは、葉はヤマツツジに似て、がく片は腺毛をもたず白毛のみであり、おしべは6~9本で、リュウキユウ系でなく明らかにオオヤマツ

ツジ系 (*R. transiens* Nakai) のものである。がく片が大きく白色で花弁状となり、こしみの咲の花形で、花の豊かな美しい品種である。花冠上部内面に緑色の斑点があり、めしべはやや太く緑白色となる。がく片の弁化の程度は個体によってかなり変化があり、披針形で緑白色のものから、大形の花弁状となり、純白色で裂片のふちがあらうくいくつかにさけるものまでである。古い記録は見あたらない。我々の知るかぎりでは大石 進氏 (1916) の記事が最初であり、現在のものはその記載とよく一致する。

9) 手牡丹 (テボタン), ふしみ紫 *R. tebotan* Komatsu リュウキュウ系のツジではないが、モチツツジを片親としているものなのでのせておく。紅紫色の牡丹咲の見事な品種である。おしべが弁化して広円形の巾の広い花弁が 10 数枚、バラの花の様に重ね合わさり、中心部の花弁は小さく、退化した花粉袋がついている。めしべは不規則に奇形化し、白毛と腺毛とがまばらに生える。がくは披針形で腺毛が密生し、花梗は短く長白毛が密生している。夏葉は楕円形で先はややとがり、質うすく、長白毛がやや密生し、表面に光沢があるのが特徴である。全体モチツツジに近いが、花梗に腺毛がなく、葉にてりがあることが異なる。花色は紫が強い紅紫色で、中井猛之進氏のいわれるように、ミカワムラサキの血が混っていることも考えられる。

10) 雪車 (ユキグルマ) *R. mucronatum* cv. *Yukiguruma* (Yamazaki) Yamazaki comb. nov. Syn. *R. macrosepalum* cv. *Yukiguruma* Yamazaki 先にユキグルマをモチツツジの品種として報告したが (本誌 44: 285), 花梗には長白毛が密生していて腺毛が少ないこと、子房は長白毛で密におおわれ腺毛がない点で、モチツツジ系とは異っている。おしべは 10 本であり、枝が立つ性質はモチツツジ系に似るが、花の性質を重視してシロリュウキュウ系とするのが適当と思う。シロリュウキュウからは花冠が深くさける点と、葉がより細く先がとがるので区別される。

(東京都中野区 [redacted])

Explanation of Plates VI-VII

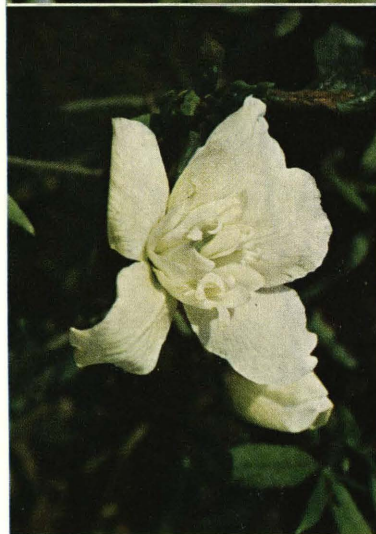
Plate VI. Upper left, *Rhododendron mucronatum* cv. *Ryukyushibori*. Right, *R. mucronatum* cv. *Plenum*. Lower left, *R. transiens* cv. *Shironishiki*. Right, *R. mucronatum* cv. *Narcissiflorum*.

Plate VII. Upper left, *R. hortense* cv. *Oriukiu*. Right, *R. hortense* cv. *Shirayuki*. Lower left, *R. hortense* cv. *Sekidera*. Right, *R. tebotan*.

キムロシ



シロムツウ



リュウキムウジボリ



フジマツヨウ



T. YAMAZAKI & F. YAMAZAKI: *Rhododendron mucronatum*

セキデラ



ミノマツカゼ



チボタン



シラユキ



T. YAMAZAKI & F. YAMAZAKI: *Rhododendron mucronatum*